

# 光

菅田 忠志

あれからどのくらい年月が経ったのだろう。おふくろの実家に縁故疎開をしていた頃だから、かれこれ50年以上たつことになる。

記憶も随分とつすれたものになってしまったのも無理はない。

疎開直前までですんでいた神戸の菅原の家では、床下に掘った防空壕に、何度かもぐり込んだ記憶もある。

床下独特の湿気くさい臭いを我慢し、こおろぎの仲間らしき虫たちに、不機嫌に迎えられながら、毎回頭を打ちつつもぐり込んだものだ。

空襲警報のサイレンが鳴ると、決して明るくはない部屋の裸電球の光でさえも、灯火管制のため、下から黒くて厚手の風呂敷で包み込むようにしてさえぎり、壕の中で敵の通過をじっと待つことを繰り返し返

- 1 -

していた。

今なら一家に何個もある懐中電灯も、当時は高級家財の部類だったのか、我家にはそんなものはなかった。

時々暗い夜空を照らし出すようによぎってゆく焼夷弾らしき光が、どこか近くに落とされたことを伝えた。

この「重苦しい光」の記憶は今でもふと思い出されることがある。

幸いこのあと、疎開先の思い出として、なんとも心地よい光との出会いの記憶もある。

いや「光」というほど力強いものではなく、ぽろぽろともしながら幻想的に点々と飛びゆく蛍のあかりは、6月、ちょうどごころの風物詩となり、子供の心を夢中にさせた。

黒い風呂敷のすき間から漏れる裸電球の光を見ることはなくなつたが、蛍の光が少なくなつたことは

- 2 -

淋しい。

星の光といい、蛍の光といい、弱い光ばかりが追いやられ、きびきびと夜通し輝き、眠らぬ街が大きくなつてゆく。「今」は、果たして幸せな世の中なのだろうか…。

今度の日曜日の夕刻から、近くの公園で「蛍鑑賞の夕べ」があるとの回覧板が廻ってきた。

3月に子供会で幼虫を放したものらしい。久しぶりに「蛍の光」に逢つて来よう。